

岡山儀七宛書簡目録―戦前の岩手県文化活動を尋ねて―

秋枝(青木)美保(人間文化学科)

石川啄木と親交があり、啄木の作品の紹介に功績のあった新聞人(岩手毎日新聞編集長)の岡山儀七宛書簡(葉書七四通、封書二四通)の目録(書簡の日付は明治四一年～昭和一八年)と概要を紹介する。差出人の中には、啄木や金田一京助を輩出した盛岡中学の同窓生や、明治末期のローマ字論者、田丸卓郎、当時岩手県歌壇のリーダー的存在であった菊池知勇、岡山の俳句の仲間などがあり、当時の岩手県内文化活動を知る貴重な資料である。

【キーワード】岡山儀七、岩手県の芸術、思潮史

はじめに

筆者は、二〇一四年春、盛岡市内のさる古書店から「岡山儀七宛書簡」(葉書七四通、封書二四通)を入手した。筆者は、現在宮沢賢治の「心象スケッチ」という新しい表現活動の誕生の経緯について研究しており、岩手文壇、及び中央文壇、あるいは画壇との交流関係について調査をしているところであるが、その調査の上で、この書簡は極めて重要な資料であることが判明したので、ここに基礎資料としてその目録及びその概要について解説する。

1, 岡山儀七について

岡山儀七(明治一八年～昭和四〇年)は、俳人、新聞人として

活躍。石川啄木とも親交のあった人物でもある。花巻市公式ホームページ「はなまきまなびガイド」には以下のように説明がある。

花巻市四日町生まれ。岩手県で詩の宮沢賢治、短歌の石川啄木、俳句の岡山儀七(不衣)と言われた。盛岡中学時代に一年先輩である石川啄木と出会い親交を深めていく。岩手毎日新聞社に二〇年余り勤めた後、編集長となる。世に名前は残されていないが、身も俳人として才能を発揮した。花巻市愛宕町雄山寺に句碑「鶏頭や夕日に染まり地獄変」が建てられている。

また、森義真『啄木 ふるさと人との交わり』(注1)では、啄木の「盛岡中学 後輩」の項に置かれており、詳細な解説がある。

出生については、貴族議員伊藤儀兵衛の四男として、稗貫郡花巻町四日市町に生まれたとあり、四歳の時に同町岡山直機（現・盛岡市）の養子に出されたという。また、岡山家は「盛岡の永福寺の末寺である八幡寺の住職を務めていた」とある。儀七は、花巻尋常高等小学校卒業後、寺の没落に伴い、父が盛岡で就職したのを機に盛岡に移住、盛岡中学に入学した。二年生のときに石川啄木と知り合い、啄木が主宰する短歌のグループ「白羊会」に入会、「月下」や「残紅」と号して短歌を作ったという。

明治三十七年に仙台の第二高等学校（現・東北大学）に入学したが、翌年病氣のため、中退、盛岡に戻った。その頃、加賀野積町の石川家を訪ねた際、啄木と妻やその姉妹と五人での歌会に参加することになり、啄木はそれを岩手日報紙に「十一夜の会」として連載中のコラム「閑天地」に掲載したという。

明治三十九年に岩手毎日新聞社に入社、以後二〇年間にわたり編集長を務めた。この間、東京朝日新聞の佐藤北江から再三勧誘があったが、上京しなかったという。ジャーナリストとして当時の文化や時代について明確な見解を発表し、啄木にも刺激を与えた。啄木の『一握の砂』について、発刊後すぐに評論を発表。また、明治四四年一月二日社説に「平民の為の文明」を書き始めたのに対して、啄木は「平信（与岡山君書）」を書き始めた。なお、啄木と岡山との交友については、雑誌『共存共栄』に連載した「啄木について思い出す事共」に語られているという。啄木の雑誌『小天地』発行前後の動向については「第一級の資料」だという。

大正七年、満三三歳のとき、松根東洋城が主宰する俳誌『洪柿』

の同人となり、「不衣」の俳号で作品を発表するようになった。岡山は、昭和一八年一月二〇日、啄木が「小天地」を発行した盛岡市加賀野積町の家で死去した。

以上のように、岡山儀七は、新聞人として、明治末期から昭和にかけて盛岡の新しい文化の動向の中心にいたのであり、儀七宛の文化人の書簡は、それらの内実を明らかにするものとして地方文化史を考える上で重要な資料である。特に彼が編集長を務めていた大正期の岩手毎日新聞（明治三十九年～昭和八年）は、新派短歌の活動をはじめ、当時後期印象派の影響を受けながら抽象画に挑戦しつつあった大正初期の萬鉄五郎の挿画を多く載せ、若手芸術家の作品発表の場となり、多くの文化を生む母体となった。その中で、宮沢賢治が大正一二年に童話「やまなし」をはじめ、作品を紙上に掲載していることも、背後に編集長の配慮が透かし見られる。なお、今後の研究においては、その間の文化人の所感の一端を、これらの儀七宛書簡から明らかにすることが必要である。本稿では、その基礎作業として、書簡の目録と一部の内容についての概観を述べる。

2、岡山儀七宛書簡目録 封書

4	3	2	1	
菊池武雄	菊池武雄	菊池武雄	田丸卓郎	差出人氏名
東京日日新聞社	東京市外中野町小滝一四五〇	東京市外中野町小滝一四四〇	東京市外中野町小滝一四四〇	差出人住所
中野に	中野に	中野に	中野に	日付
昭和四・一・二	昭和四・一・二	昭和四・一・二	昭和四・一・二	内容

20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5
十方庵	盛岡裁判所	協同組合新聞社 平 隆	真言宗永福寺	大坂圭三?	伊藤儀兵衛	伊藤儀兵衛	大村胡月	及川 議	及川 議	大阪兵四郎	佐伯 正	立花信種	和賀新聞社 中島保■	岡本牧夫	岩手県物産販売 幹旋所・岩手振 興協会
		東京市麹町区有楽町一丁目二番地	盛岡市山岸町	水町大町?	淀橋区下落合二丁目七五五	淀橋区下落合二丁目七五五	横浜市神奈川区桐畑三	小樽市■町一〇	小樽市■町一〇	和賀郡小山田町	大阪市東区石町一ノ九	和賀郡黒澤尻町寿柳町通五〇	黒澤尻町	京都市左京区川島北裏五八	神田区須田町 牛込区市ヶ谷田町
大正十二年十一月		不明	昭和十八年	■年五月七日	不明	不明・一二・二二	昭和一八・九〇・■七	不明・七・二二	昭和一八・一〇・二五	昭和一七・一一・一四	昭和一七・四・六 内日付	昭和一七・三・一四 消印	昭和一六・四・二	昭和一四・三・一〇	昭和一二・六
凡例(句集 の編集に関 すること)		宛名 黒澤 尻町共存共 栄社気付 田中秀四郎					俳諧深耕 秋の暮の巻 俳選 玉坡	句稿 玉坡 俳選 玉坡	暮選 玉坡 俳選 玉坡						

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
石川光■	安藤■	田丸たろう	田丸?	田丸陸郎	田丸陸郎	田丸陸郎	田丸陸郎	孤杉生	安村■	■生	小沢恒一	金子定一	金子定一	金子定一	差出人氏名
徳島市富田浦町仲町ミ ス・リッソフ	東京■下■	本郷区曙町			本郷区曙町		東京本郷区曙町巻番地 日本のろーま字社	牛込区■町	東京■山小町		赤坂区丹後町二円後館	東京■町			差出人住所
一九一五年一月元 旦	大正■年一月	大正九年一月	不明	昭和三年一月三日	大正一四年一月 六日	大正六年一月	明治四五年六月一 二日	明治四四年七月一 日	明治四四年五月一 三日	明治四二年一月一 四日	明治四一年一二月 二六日	不明	昭和二〇年?	不明	日付
			文部省第七回美術 展覧会入選竹内梧 風氏筆		文部省第五回美術 展覧会出品竹内梧 風氏筆										内容

3, 岡山儀七宛書簡目録 葉書

29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16
田口其舟	田口其舟	田口其舟	大阪兵四郎	大阪兵四郎	中村 ■■	安藤直一	三田藤吾	川村兼五郎	鶴田浅次郎	笠神馬山	阿部月 ■	宮野小 ■■	小林茂雄
二戸郡	二戸郡小鳥谷村小鳥谷国民学校	二戸郡小鳥谷村				秋田県山本郡二 ■■ 町	世田谷区松原町四丁目四四五番地	東京市品川区大井伊藤町五六八五	仙台市国分町	東京都下日暮里十八	神奈川県 ■■ 押切湯川海沼病院		秋田県大館町大館病院
昭和一八年	昭和一八年	昭和一八年九月四日	昭和一七年二月一日	昭和一七年一月七日	昭和一三年六月三日	昭和一二年五月一日	昭和一二年一月一日	昭和一二年四月二三日	昭和一〇年九月九日	昭和七年二月一日	昭和六年？	昭和五年一月二日消印	昭和三年六月四日
蜻蛉ノ巻	秋の暮	俳諧深耕秋の暮十句投稿											

42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30
池田直実	村上岳太郎	岳楽	齊藤吉五郎	齊藤吉五郎	■ ■ 月泉	■ ■ 月泉	■ ■ 月泉	■ ■ 月泉	及川 議	及川 議	及川 議	及川 議
岩手県花巻市館六〇	岩手中学校三甲主任	花巻町花城	青森市浦町					花巻市南館		北見国常呂郡伊屯武華二分岐地崎出張所		？
昭和一八年三月二五日	昭和一八年一月二一日	昭和一八年？		昭和一八年	昭和一八年一〇月二七	昭和一八年一〇月四日	昭和一八年九月五日	昭和一八年	昭和一八年一〇月二七日	昭和一八年八月二〇日	昭和一八年六月二五日	昭和一八年六月六日
		秋の暮選	雲の峰十句選	秋の暮		秋の暮		秋の暮				

52	池田正悦	東京下谷区車坂町七二宮 崎方	不明	
51	■然■	気仙郡大船渡町	不明	
50	佐々木伸二	小樽市	不明	
49	立山	沼宮内	不明	
48	■田庄助	稗貫郡花巻町■	不明	
47	谷藤萬助	盛岡市下厨川阿倍館	不明	
46	菊池知勇	東京市外原宿	不明	
45	岩手教育会編集 部		昭和一七年？一 月二七日	芭蕉翁二百 五十年忌原 稿依頼
44	熊谷季貞	気仙郡大船渡町	昭和一八年三月二 六日	
43	三浦■	東京市世田谷区■	昭和一八年六月一 二日	

※判読不能のものについては表に挙げていない。

3, 「岡山儀七宛書簡」の資料的価値について

「岡山儀七宛書簡」の資料的価値については、今後の研究によって明らかにすべきであるが、現在前述の『啄木 ふるさと人の交わり』その他の資料によって明らかになっている差出人の現状、及び書簡の内容について概観する。

一、金子定一（かねていいち 明治一八年～昭和三五年）…葉書

1、2、3

盛岡中学の啄木の後輩。明治一八年六月三日、新聞記者であつた定敬の長男として、盛岡市加賀野に生まれた。明治三三年盛岡中学に入学。啄木の二級下の後輩。校友会雑誌の委員を務めた際に、啄木と知り合った。文学に関心のあつた定一は、同級の細越毅夫とともに「闇潮会」を起こし、啄木主宰の短歌グループ「白羊会」にも参加、活動した。盛中三年の時中退、上京。明治三五年八月の白羊会定例会は、定一の送別歌会となり、そのときの写真が『啄木写真帖』などに掲載されている。その年の一〇月末に、啄木も盛中を中退して上京。定一を訪ねる。

定一は神田錦町の日本力行会（仙台出身の島貫兵太夫が神田基督教会の附属事業として始めた苦学生救済活動を行う団体の寮で苦学しながら働いていた。上京後の「啄木日記」に、定一との交友が記されている。定一は、新聞配達など様々な活動の中で「牛乳部」に属し、朝・昼は牛乳配達、夜は私立成城中学の夜間部に通学。

日本力行会は、苦学生に渡米の方法と現地の就職の紹介もしていたといい、明治三七年頃の啄木の渡米熱は、定一経由とも考えられている。また、定一経由で啄木が雑誌『文芸界』の佐々醒雪に紹介されたが断られたという一件も有名。

定一は、成城中学卒業後、一時岩手県稗貫郡で代用教員を務めたが、陸軍士官学校、陸軍大学校と進学、軍人とな

り、最後は陸軍少将で退役した。その後郷里に戻り、郷土史研究会の奥羽史談会の会長を務め、昭和一七年には衆議院議員に選出された。戦後も奥羽史談会の会長を続け、新聞や雑誌に文章を発表。

昭和三年四月三〇日、盛岡で病死。『啄木 ふるさと人との交わり』

二、小澤恒一（おざわつねいち 明治一六年～昭和三八年）：葉書4

盛岡中学の啄木の同級生。明治一六年六月六日、和賀郡黒沢尻町に、小澤莊次郎の長男として生まれた。明治三一年に盛岡に入学。三年から四年にかけて「ユニオン会」の仲間として交流。「ユニオン会」は、正規の科目「ナショナル・リーダー第三」よりレベルの高い「ユニオン・リーダー第四」をテキストにした輪読会。メンバーには、啄木の他、阿部修一郎、伊東圭一郎、小野弘吉の五人。「啄木日記」に記述がある。

卒業後、郷里に近い二子村小学校で代用教員を務めた後、上京して早稲田大学英文科に進学。卒業後は香川師範、広島師範などを経て、早稲田大学教育学部の教授となった。早大退職後は、国士館大学教授を務めながら、昭和三年から郷里の北上学園北上商業高等学校の校長を務める。妻は、盛岡女学校で啄木の妻堀合節子と同級生。

著書に『久遠の青年石川啄木』『石川啄木 その秘められた愛と詩情』がある。昭和二八年七月二日、東京で病死。

『啄木 ふるさと人との交わり』

三、田丸卓郎（たまるたくろう 明治五年～昭和七年）：葉書

13. 封書1

理論物理学者・ローマ字国字論者。明治五年九月二九日、盛岡清水小路にて旧盛岡藩士田丸十郎、センの次男として生まれた。明治一二年には伯父である中原雅郎一家とともに暮らし、宮城県師範学校附属小学校、東京師範学校附属小学校へ通った。明治一五年九月、帝国大学理科大学（現東京大学）へ入学した田丸は、田中館愛橘の元で物理学を学んだのち、熊本第五高等学校へ赴任、この時の教え子に寺田寅彦がいた。その後ドイツ留学を経て、明治四十年に東京帝国大学理科大学教授となった。

田丸はドイツから帰朝した明治三八年、日本式ローマ字に関する演説を行う。この後、田丸は恩師田中館とともに熱心な日本式ローマ字論者となり、その普及に努めた。二人は明治四二年に日本のローマ字社を設立、日本式ローマ字による雑誌「ROMAJISEKI」や「ローマ字少年」を出版した。また田丸は大正九年に『ローマ字文の研究』を出版、この本は日本式ローマ字の名著として今でも版を重ねている。昭和五年に行われた臨時ローマ字調査会には病軀をおして出席し、三時間もの演説で日本式ローマ字の必要性を説いた。（盛岡市ホームページ「盛岡の先人たち」）

四、田丸陸郎（たまるりくろう 生没年不詳）：葉書8、9、10.

11. 12（？）

田丸卓郎の弟と思われる。（文面にローマ字普及に関するこ

とを、岩手毎日新聞社の編集長であった岡山に対して相談する内容のものがあり、「兄」の活動について述べたところがある。）ただ、インターネットの検索においては、田丸卓郎の弟としては、節郎（明治二年～昭和十九年 化学者）の情報があるのみで、陸郎のことは記載がない。詳細は不明。

五、菊池知勇（きくちちゆう・ともお） 明治三年～昭和四十七年

教育者・歌人。明治二年四月七日生まれ。慶応幼稚舎教員。大正一五年はじめての綴方専門誌「綴方教育」を創刊。歌人としては明治四三年若山牧水の「創作」創刊にくわわり昭和二年口語短歌誌「ぬはり」を創刊した。昭和四七年五月八日死去。八三歳。岩手県出身。岩手師範卒。歌集に「落葉樹」「山霧」など。（デジタル版日本人名大辞典）

菊池知勇については、拙論「宮沢賢治の短歌と岩手県の文学活動——「心象スケッチ」への道程」（『宮沢賢治 Annual Vol.25』掲載）に一部言及しているが、明治末期から大正初期にかけて、岩手県内の文壇において若手のリーダーとして新派短歌の活動の中核にいた人物である。若山牧水の「創作」における彼らの活動は、大正三年岩手毎日新聞に毎日のように掲載されている。本資料における菊池の葉書の内容は、菊池の作品についての岡山の批評について感謝を述べたもので、日付・消印が不明であることは残念であるが、菊池の住所が原宿になっているため、彼が東京在住の折と考えられ、二人の関係を物語る資料となっている。

六、菊池武雄（きくちたけお）…封書2, 3, 4

菊池武雄については、人物の特定が困難なところがある。というのは、同姓同名で、岩手師範学校卒業、後に小学校の美術の教師となった人物がいるからである。こちらの人物（以後菊池Aとする）は、宮沢賢治の『注文の多い料理店』の表紙・挿絵を担当したことも有名で、昭和六年に賢治が東京の旅館で突如具合が悪くなったときに、旅館まで駆けつけて看病したという人物である。

菊池Aに関するこれまでの記述で最も新しいのは、『宮沢賢治 イーハトーブ学事典』（注2）の記述（栗原敦担当）である。これによれば、次のようである。

明治二七年江刺郡稲瀬村生まれ、岩手師範学校卒。大正一三年福岡中学校教諭となり、図画を担当。師範学校の同級生、藤原嘉藤治の推薦で、宮沢賢治の『注文の多い料理店』を担当することになった。大正一四年上京、都内の小学校で図画教師を務める。友人深沢省三を通じて、雑誌『赤い鳥』に賢治の童話幹旋するが、掲載されなかった。大正一五年結婚、巣鴨に新居を構え、ここを賢治が訪問したことがある。賢治のことを伊藤チエの嫂に話したのは菊池である、とあり、賢治との浅からぬ交流があった人物である。

もう一人の菊池武雄（菊池B）は、新聞人である。この人物については、『ブログ古書』で、「二〇一二年一月・二月」に記載がある。そこには、崑憲治なる人物のブログが引用されており、新聞人菊池武雄について「岡山儀七によって世に送り出された新聞人がある。菊池武雄（M30・7・13生）である。菊池

武雄は、大正十年ころ花巻から『猫額私語』などを『岩手毎日新聞』に投稿していた。それを主筆岡山儀七が認めて『岩手毎日新聞』に入社させた。菊池は後に『東京日日新聞』に移り、盛岡や青森の支局長をへて本社に入り編集部長に就く。敗戦後は『岩手新報』の副社長、編集局長となる。昭和四十年ころは、東京練馬区で『練馬新聞』を発行している。菊池は宮沢賢治（M20・8・27生）の友人であった。」とあるという。

これについて「ブログ古書」の主筆者は、新聞人菊池武雄と画家菊池武雄は別人ではないかと疑問を呈している。本資料の封書2、3、4のうち、4は「東京日日新聞」専用封筒を用いており、この差出人は「菊池B」であろうと推測される。この封書はすべて昭和四年のもので、当時の岩手毎日新聞社の経営状況について言及がある。「何せ東京に来てからまだ二年足らず」という一節があり、これによれば上京は昭和二年のことかと推測される。菊池Aが大正一四年に上京とあるので、一致しない。手紙の文面には、吉田孤羊（注4）のことも登場し、当時の東京における岩手県人の交流や岩手毎日新聞の経営状況等が省みられる貴重な資料である。

七、佐伯 正（さへきただし） 明治一四年～昭和一七年…封書9

宮沢賢治が書いた書簡（昭和六年三月）下書の宛名中に同名の人物がいる。『新校本宮沢賢治全集 第十五巻 校異篇』（注3）の人物解説の項には、出身は宮城県現名取市、明治四三年東京帝国大学哲学科卒業、大川周明と大学で交友、歌人、とあり、昭和二年三月から昭和四年八月まで岩手県社会事業主事等とし

て在任、方面委員を務めた宮沢政次郎と交流があったとのこと、その縁で賢治とも相知るようになったとある。昭和一五年に、板垣征四郎とともに中国へわたり、大阪との間を往復、大阪で没したという。

八、小林茂雄（こばやししげお） 明治一九年～昭和一七年…葉書16.

啄木の一年後輩。盛岡、長町の生まれ、盛岡中学から仙台医専に進学。魯迅と同級生。外遊や勤務医を経て、盛岡市内に産婦人科医を開業。盛岡市医師会長、岩手県医師会長、盛岡市議を歴任した。盛岡中学時代は、啄木の「白羊会」や野村胡堂の「杜陵吟社」二所属、「花郷」「花京」として短歌を、「茂夫」や「滋夫」として俳句に親しんだという。

手紙の内容については、①新しい文化活動についての援助の依頼、②作品批評についての礼状、③新聞界の動向、④俳句に関するもの、⑤その他個人的なこと、といった内容である。差出人の多くは、盛岡中学や盛岡師範の卒業生で、岩手県内の文化活動に携わった人物たちである。今後は解説を進めて、二〇世紀初頭の岩手県における文化活動を明らかにしたい。

注1 森義真『啄木 ふるさと人との交わり』（平成二六年四月

盛岡出版コミュニケーション）

注2 『宮沢賢治イーハトーブ学事典』（天沢退次郎・金子努・鈴木貞美編、弘文堂、平成二二年一二月）

注3 『新校本宮澤賢治全集 第十五卷 校異篇』(筑摩書房、平成七年十二月)

注4 「明治三五年〜昭和四八年 文芸研究家。岩手毎日新聞社の記者などをへて改造社にはいる。石川啄木の研究家として知られ、石川啄木全集」を編集校訂した。のち郷里岩手県盛岡市立図書館長をつとめた。」「著作に「啄木を繞る人々」「啄木写真帖」など」。(デジタル版日本人名大辞典)

Catalog of a letters for Okayama Gisichi
—To know cultural activities in Iwate-ken before the Second World War.—

Miho Akieda(Aoki)
(Department of Human Cultures)

This essay introduces a catalog (for a date of a letter, 1908-1943) and the outline of a letter for Okayama Gisichi (74 postcards and 24 sealed letters). 、 Okayama Gisichi was a graduate of Morioka junior high school and was on friendly terms with Ishikawa Takuboku. He served as a chief editor of Iwate Mainichi Newspapers lengthily and did the work which spreads Takuboku's work among a world in the mean time. It's included whether you're the person who carried on cultural activities at in Iwate-ken and Tokyo before the Second World War by a classmate of Morioka junior high school in the sender. The contents of these letters are the valuable material from which I learn about cultural activities in Iwate-ken in those days.

【Okayama Gishichi The artistry of Iwate - ken History of ideas】